

日本唾液腺学会の歴史

森 永 正 二 郎

1. はじめに

唾液腺学会が生まれてから半世紀が過ぎた。学会員の世代も随分と若返り、昨年から会長をおおせつかった筆者は、初めての戦後世代の会長となる。学会の初期の時代をご存知の先輩方から見ると、隔世の感があるのではないだろうか。世の中の営みは、もっぱら今とこれからを考えながら進んでゆくものであり、学術活動もしかりである。しかし、温故知新という言葉を引きまでもなく、機会を設けて時に過去を振り返ってみることは、いまの自分たちの立つ位置を自覚し、これから進む道を考える上で意味あることと思われる。ここに、唾液腺学会の歩みを、これまで事務局に保存・蓄積されてきた学会誌の情報を中心に整理してみたい。表1に示すように、この学会の名称には変遷がある。これに沿って、4つの時代に分けて見ていくことにする。なお、歴代の役員、演題数、特別講演の内容について、それぞれ表2～4にまとめた。本文中、敬称はすべて省略することにする。

2. 有史以前

この学会の揺籃は、昭和3年(1928)頃に緒方知三郎(東大病理)が唾液腺内分泌の病理学的研究に着手したことに始まるといっていいだろう。なお、緒方知三郎は幕末の蘭学者緒方洪庵の孫にあたる。何故緒方が唾液腺の“内分泌”に興味を持った

のかは、筆者は考証していないのでわからない。因みに、カナダのバンティングとベストが膵臓からインスリンの抽出に成功したのが大正10年(1921)のことである。昭和14～18年には、緒方知三郎の唾液腺“内分泌学説”が成立し、昭和19年(1944)に、東大薬学部生理化学教室(当時医学部薬学科臓器薬品化学教室)の緒方章(緒方知三郎の弟)、伊藤四十二が“ホルモン物質”(パロチン)の抽出に成功したことにより、いっそう研究が発展する。昭和24年(1949)には電気泳動分析法によりパロチンの精製に成功し、田坂定孝(東大内科)らによるパロチンの臨床的使用も開始されることになる。これらを元に、昭和26～28年には文部省総合研究班「唾液腺ホルモンに関する研究」(主任研究者:緒方知三郎, 研究組織:40名)、いわゆるパロチン研究班が成立し、活発な研究が行われた。パロチンのサンプル製造は、帝国臓器製薬株式会社研究部の新延信吉が担当した。

3. 唾液腺ホルモン研究会の時代 (1956～1958)

“パロチン研究班”が終了してから2年間のブランクの後、“唾液腺ホルモン”の研究を継続させようと、昭和31年(1956)、唾液腺ホルモン研究会が発足された(表1)。緒方知三郎を会長とし、副会長は緒方章、幹事は伊藤四十二と滝沢延次郎(千葉医大病理)であった(表2, 図1)。集会の名称は「唾液腺ホルモンシ

ンポジウム」というものであり、演題抄録は雑誌「ホルモンと臨床」に掲載されることになった。第1回唾液腺ホルモンシンポジウムは、11月14日と15日の2日間、東大医学部本館大講堂を会場として開催され、一般演題数は47題に達していた(表3)。

4. 日本唾液腺研究会の時代(1959~1982)

昭和34年(1959)の第4回の会合から、団体の名称が「唾液腺ホルモン研究会」から「日本唾液腺研究会」に、会合の名称が「唾液腺ホルモンシンポジウム」から「唾液腺シンポジウム」に変更され、独立した会誌「唾液腺シンポジウム」が新たに発刊されることになった(表1)(図2, 3)。第4回の会合のときに第1巻の会誌が発行されたことから、この会と会誌の数字の3つのずれは後まで続くことになる。このときの会長は緒方知三郎、副会長は緒方章、幹事は伊藤四十二、河野康雄(東大口腔外科)、田坂定孝、滝沢延次郎の4名である(表2)。運営委員(現在の評議員に相当)には、沖中重雄(東大内科)も名を連ねている。

会誌第1巻には、「唾液腺研究会」の設立の趣意について、次のような記載がある。“文部科学省研究費による総合研究班の後を受けて結成されました「唾液腺ホルモン研究会」はすでに3回に亘ってシンポジウムを開催し、(中略)…本研究会の名称も「唾液腺研究会」と改め、従来の唾液腺内分泌の研究を更に一層広い視野の上に立って進めつつ、同時に唾液腺及び唾液の新しい生物学的、生物化学、医学、歯科医学、および薬学研究者相互の自由の話し合いの場として活用し、数々のなぞを秘めた唾液腺および唾液の科学的解明の推進を目的とした研究会に改組致すことになりました…(後略)。” また、田坂定孝による「唾液腺研究会発足に際して」と題する寄稿には次のような記載がある。“…昨年即ち1959年はその第4回の研究発表会を催したのでありますが、第4回からは研究の発表を唾液腺ホルモン研究に限定せず、広く唾液腺の内外分泌機能全般を含めた研

究発展のためのシンポジウムとなし、会則を設けて、これを唾液腺研究会と称し、次第に1つの学会の形成を指向するに至り、又更にこれを期として本誌の如きシンポジウム記録を一本に集採した会誌を持つに至ったのであります。かかる唾液腺を中心とした研究会の長い歴史的基礎とその成果は、世界においても他に類例を見ないものであり、是非とも我々の手で今後とも本会の継続維持を計らなければならぬものであることは云うを待たないことであります。”

会長は、昭和34~35年(1959~1960)が緒方知三郎、昭和36~43年(1961~1968)が緒方章、昭和44~46年(1969~1971)が滝沢延次郎、昭和47~49年(1972~1974)が田坂定孝、昭和50~56年(1975~1981)が井出源四郎(千葉大病理)、昭和57年(1982)には青沼繁(大阪大学薬学部)へと引き継がれてゆく(表1)。事務所は、はじめ東京帝大薬学部生理化学教室内、後に千葉大病理学教室内に置かれ、さらに大阪大学薬学部に移った。会誌の編集は、千葉大病理の滝沢延次郎から、井出源四郎、長尾孝一(千葉大・帝京大市原病院病理)が順に担当している。会場は種々のところが使われており、関西で行われたこともあったが、昭和45年(1970)からは、しばらくの間日本都市センターに固定されることになる(表1)。

唾液腺研究会の時代になって、“唾液腺ホルモン”関連以外の内容の演題も発表されるようになったものの、一般演題数は徐々に減少した(表3)。これまで会期が2日間であったものが、昭和38年(1963)の第8回からは1日だけで済むようになり、昭和46年(1971)の第16回には一般演題数が10題にまで落ち込み、そのまましばらく低迷が続くことになる。その背景には、昭和45年(1970)に滝沢延次郎、昭和48年(1973)に緒方知三郎、昭和51年(1976)に伊藤四十二、昭和53年(1978)に緒方章が相次いで逝去されるという、この研究会の発足に尽力された方々の他界が大きく影響していたものと思われる。なお、「唾液腺シンポジウム第10巻」には、当時の会長の緒方章が、巻頭言に「偶感」と題する味わい深い一文を残している。滝沢延次郎は会長就任後2年で現役の会長のまま死去したこと



図1. 本学会初期の中心人物

上段左より，緒方知三郎（東京帝大病理学），緒方 章（東京帝大薬学）. 下段左より，伊藤四十二（東京帝大薬学）. 滝沢延次郎（東京帝大・千葉医大病理学），田坂定孝（東京帝大内科）.



図2. 会誌「唾液腺シンポジウム第2巻」の表紙
昭和35年（1960）に開催された第5回唾液腺シンポジウムの記録が，昭和36年に発行されたこの会誌の中に掲載されている。団体名は「唾液腺研究会」となっている。

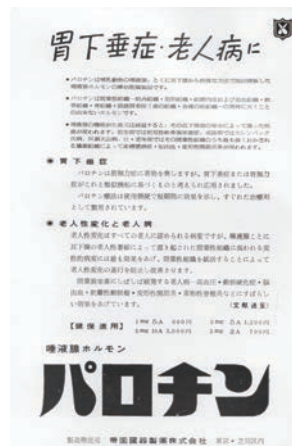


図3. パロチンの広告

図2の会誌に掲載されているもの。

表1. 唾液腺学会の名称と会場の推移

回	年	会長	学会の名称	会合の名称	会誌	会場				
1	1956	緒方知三郎	唾液腺ホルモン研究会	唾液腺ホルモンシンポジウム	「ホルモンと臨床」 に抄録掲載	東大医学部本館大講堂				
2	1957					神田学士会館一ツ橋講				
3	1958					神田学士会館一ツ橋講				
4	1959	緒方 章	日本唾液腺研究会	唾液腺シンポジウム	唾液腺シンポジウム	薬業永田町会館講堂				
5	1960					東大薬学部記念講堂				
6	1961									
7	1962									
8	1963									
9	1964									
10	1965									
11	1966									
12	1967									
13	1968									
14	1969					滝沢延次郎				薬業健保会館
15	1970									大阪今橋クラブ
16	1971					田坂定孝				私学会館
17	1972				東京医科歯科大学					
18	1973				東京大学総合図書館					
19	1974	井出源四郎				京都府会館				
20	1975					日本都市センター				
21	1976									
22	1977									
23	1978									
24	1979									
25	1980									
26	1981	青沼 繁	日本唾液腺学会	日本唾液腺学会	日本唾液腺学会誌					
27	1982									
28	1983									
29	1984									
30	1985									
31	1986									
32	1987	高谷 治								
33	1988									
34	1989									
35	1990									
36	1991									
37	1992									
38	1993									
39	1994	遠藤啓良								
40	1995									
41	1996									
42	1997									
43	1998									
44	1999	久米川正好				全共連ビル				
45	2000									
46	2001									
47	2002									
48	2003	森永正二郎				帝国機器製菓本社ビル				
49	2004									
50	2005									
51	2006					三田NNホール				
52	2007					東京医科歯科大学				
53	2008					日本科学未来館				
						文京学院大学				

表2. 唾液腺学会歴代役員

回	年	会長	副会長	幹事(あいうえお順)	事務幹事
1	1956	緒方知三郎	緒方 章	伊藤四十二, 滝沢延次郎	(不在)
2	1957				
3	1958				
4	1959			伊藤四十二, 河野康雄, 滝沢延次郎, 田坂定孝	
5	1960			伊藤四十二, 今川与曹, 滝沢延次郎, 田坂定孝	
6	1961	緒方 章	(不在)		
7	1962				
8	1963				
9	1964				
10	1965				
11	1966				
12	1967				
13	1968				
14	1969			滝沢延次郎	伊藤四十二, 今川与曹, 田坂定孝
15	1970			井出源四郎	
16	1971	田坂定孝	伊藤四十二, 井出源四郎, 今川与曹, 木下四郎, 鶴藤 亟, 高谷 治		
17	1972	田坂定孝	(不在)	伊藤四十二, 井出源四郎, 今川与曹, 遠藤浩良, 木下四郎, 高谷 治	
18	1973				
19	1974	井出源四郎	(不在)	青沼 繁, 遠藤浩良, 末田 武, 高谷 治, 長尾孝一, 堀越達郎	
20	1975				
21	1976				
22	1977				
23	1978				
24	1979				
25	1980			青沼 繁, 遠藤浩良, 高谷 治, 長尾孝一, 堀越達郎	
26	1981				
27	1982	青沼 繁	(不在)	遠藤浩良, 高谷 治, 長尾孝一, 堀越達郎	
28	1983			遠藤浩良, 奥田 稔, 久米川正好, 高谷 治, 長尾孝一, 堀越達郎	
29	1984				
30	1985	高谷 治	(不在)	遠藤浩良, 奥田 稔, 久米川正好, 高谷 治, 長尾孝一, 古本啓一, 堀越達郎	
31	1986				
32	1987				
33	1988				
34	1989			遠藤浩良, 奥田 稔, 久米川正好, 長尾孝一, 廣瀬聖雄, 古本啓一	
35	1990				
36	1991				
37	1992				
38	1993	遠藤浩良	(不在)	遠藤浩良, 久米川正好, 今野昭義, 長尾孝一, 廣瀬聖雄, 古本啓一	
39	1994			久米川正好, 今野昭義, 長尾孝一, 廣瀬聖雄, 古本啓一, 古山俊介	
40	1995	久米川正好	(不在)	久米川正好, 今野昭義, 長尾孝一, 廣瀬聖雄, 古本啓一, 古山俊介	
41	1996				
42	1997				
43	1998			久米川正好, 今野昭義, 長尾孝一, 古本啓一, 古山俊介, 渡邊 淳	
44	1999				
45	2000			久米川正好, 今野昭義, 芝 燦彦, 長尾孝一, 古山俊介, 森永正二郎, 渡邊 淳	
46	2001			今野昭義, 芝 燦彦, 長尾孝一, 古山俊介, 森永正二郎, 渡邊 淳	
47	2002			今野昭義, 芝 燦彦, 古山俊介, 森永正二郎, 吉原俊雄, 渡邊 淳	(不在)
48	2003				
49	2004				
50	2005				
51	2006				
52	2007	森永正二郎	吉原俊雄	天野 修, 今野昭義, 栗原琴二, 芝 燦彦, 杉谷博士, 高田 孝, 田隈泰信, 長尾俊孝	
53	2008				

になる。

昭和 57 年 (1982) の「唾液腺シンポジウム第 24 巻」の巻頭言には、会長の青沼 繁が「みんなで唾液腺研究の輪を作ろう」と題して、次のように述べ、会員を鼓舞している。“(前略) やがて時代が経過し、緒方知三郎・章先生の御他界と共にさすがこの会も、私の考えでは一つにはマンネリ化、一つには当時は盛んに流行しました「シンポジウム」という言葉が今はほとんど使われていないというイメージダウン、一つには唾液腺ホルモンであるパロチンが余りにも前に出すぎたことなどのため、二日間にわたって討論してまいりましたこの会も、ただの一日ですむようになりました。…この前の幹事会でもっと臨床の先生方の御参加を願うべきだ、もっと会の PR にも力を入れるべきだなどの大変活発な御意見をいただきました。…唾液腺の研究なら総てこの会でわかるというような各研究分野の輪をつくろうではありませんか。…” 当時の幹事の遠藤浩良 (帝京大薬学) が、組織培養の専門家である久米川正好 (城西歯大口腔解剖) を会に勧誘したのは、そうした再興に向けた活動の一つである。

なお、昭和 49 年 (1974) の「唾液腺シンポジウム第 16 巻」には、金子 仁 (日本医科大学老人病研究所) による「緒方知三郎先生の剖検報告」、昭和 53 年 (1978) の「唾液腺シンポジウム第 20 巻」には、井出源四郎による「緒方 章先生の剖検記録」が掲載されている。両先生とも、長期間にわたって自らパロチンを服用されていたことから、剖検記録にはその効果に関しても言及されている。

この間、唾液腺ホルモン研究に関しては、昭和 44 年 (1969) に帝国臓器製薬株式会社によってまとめられた「唾液腺ホルモン文献目録 (1950~1968)」に、総説論文 99、化学論文 170、薬理論文 495、臨牀論文 404、シンポジウム 591、特許 15 の、合計 1774 件の業績が収録されている。

5. 日本唾液腺学会の時代 (1983~)

昭和 58 年 (1983)、「唾液腺シンポジウム」発刊 25 周年を期に、団体の名称が「日本唾液腺研究会」から「日本唾液腺学会」に変更されることになった (表 1) (図 4)。「唾液腺シンポジウム第 25 巻」には、発刊 25 周年記念特集として、過去の歴代会長の紹介記事が掲載されている。日本唾液腺学会となってからの会長は、昭和 58~63 年 (1983~1988) が青沼 繁 (大阪大学薬学部)、昭和 64 (平成元年)~平成 6 年 (1989~1994) が高谷 治 (防衛医大内科)、平成 7~12 年 (1995~2000) が遠藤浩良 (帝京大学薬学部)、平成 13~19 年 (2001~2007) が久米川正好 (明海大学口腔解剖)、そして、平成 20 年 (2008) から筆者へと引き継がれ、現在に至っている。

昭和 58 年 (1983) には、会則の変更も行われ、“唾液腺内分泌を中心とする唾液腺の研究”という文言が、“広く唾液腺に関する諸研究”と書き換えられた。また、これまでの会則では、“事務所を会長所属の教室または施設におく”となっていたが、この年から事務幹事が事務を担当することになり、帝国臓器製薬株式会社の山元正昭が事務幹事となった (表 2)。事務幹事は、

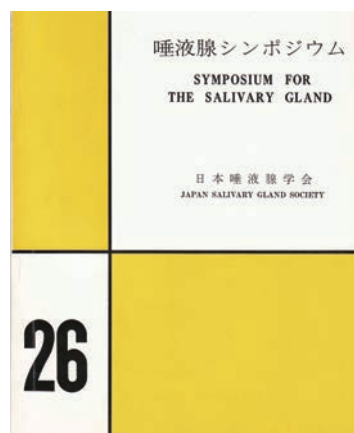


図 4. 会誌「唾液腺シンポジウム第 26 巻」の表紙
昭和 59 年 (1984) に開催された第 29 回唾液腺シンポジウムの記録が、昭和 60 年発行の会誌に記録されている。団体名は「日本唾液腺学会」に変わっている。

平成 7 年 (1995) からは柴田健雄, 平成 15 年 (2003) からは木村孝一が担当して現在に至っている。なお, 帝国臓器製薬株式会社は 2005 年にグレラン製薬との合併によりあすか製薬株式会社と社名変更されている。

昭和 62 年 (1987) には, 会合の名称自体も, 「唾液腺シンポジウム」から「日本唾液腺学会」に変更され, 会誌の名称も, 「唾液腺シンポジウム」から「日本唾液腺学会誌」に変更され (表 1), 表紙のデザインも斬新なものに変更された (図 5)。この年の「日本唾液腺学会誌 第 29 巻」には, 事務局の山元正昭がこれまでの学会の歴史を紹介し, 過去の演題数, 特別講演の内容をまとめて記録している。

これまで減少したままであった一般演題数が徐々に増加傾向を示し, 昭和 62 年 (1987) には 30 題まで回復した (表 3)。平成元年 (1989), 会長に就任した高谷 治 (防衛医大内科) は, 「日本唾液腺学会誌 31 巻」の巻頭言で, “…本学会は昭和 58 年より唾液腺学会として従来の唾液腺研究会を脱皮し, 唾液腺に関する集学的研究の発展の場として新たな発足をしたものでありまして, これは専ら前会長の青沼先生の御指導のたまものであり, …” と述べ, 平成 6 年 (1994) には, 「日本唾液腺学会誌 36 巻」の巻頭言で, “…唾液腺学会はこれらのいかなる領域からの研究にも開放されており, より積極的に各科から集まって multidisciplinary に議論さるべき学会であり, 最近では顕著なことにはレベルの高い, まとまりの良い, また, オリジナルな研究成果が報告されるようになって来て, 喜ばしく感じている次第である。…”, と述べている。実際, 平成元年から 6 年までの本学会の演題内容をみると, パロチン関連のものは 3.4% に過ぎなくなっている。

さらに, 高谷 治会長のもと, 平成 3 年 (1991) からは, 一般演題のほかに症例検討のセッションが開始された。ちなみに, 筆者は当時の幹事の長尾孝一先生から, “唾液腺学会というものがあって, 新たに症例検討を始めるので何か症例を持ってきて発表する

ように”, と誘われて症例提示したのが本学会への入会のきっかけである。症例検討は, その後徐々に演題数が増え, 10 題を越える年もできている。内容は, 一貫して唾液腺腫瘍関連病変の臨床・病理に関するものが主体となっている。また, 平成 5 年 (1993) の第 38 回からは, 学会奨励賞を出すことになり, 一般演題から 2 題が選考され, 総会に引き続き授賞式が行われることになった。

平成 7 年 (1995), 緒方章, 伊藤四十二, 青沼繁と続いてきた東大薬学一門の遠藤浩良が (東大・帝京大薬学) 会長となった。この年, 学会 40 回の節目を記念して, 記念メダルが作成され, 会員に配布された (図 6)。

平成 13 年 (2001) に会長に就任した久米川正好 (明海大歯口腔解剖) は, 専門分野が唾液腺 “内分泌” とは異なる初めての会長といえることができる。平成 15 年 (2003) には, 日本唾液腺学会のホームページ (<http://www.daekisen.org/>) が開設され (図 7), 同年の第 48 回学会から, 学会の発表はすべてパワーポイントを用いたデジタルプレゼンテーションで行われるという, 新時代を迎えることになった。なお, 同年の会誌第 44 巻から, これまで継続されてきた事後抄

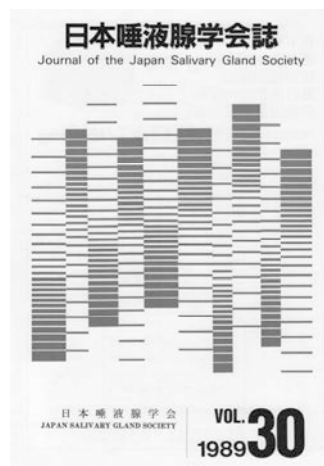


図 5. 会誌「日本唾液腺学会誌第 30 巻」の表紙
昭和 63 年 (1988) に開催された第 33 回日本唾液腺学会の記録が, 平成元年発行の会誌に記録されている。



図6. 学会40回記念メダル

表には和英の学会名と学会イニシャル(左), 裏には上部に「唾」の字の隷書体, 下部に会誌表紙のパターン模様をアレンジしたものが掘り込まれている(右).

録, 質疑応答記録, 巻頭言, 編集後記が割愛されることになった. また, これまで別々に行っていた演題抄録集の内容を学会誌に収めることにしたため, 平成16年の第49回学会と平成17年の第50回学会の記録が合冊され, 1冊の日本唾液腺学会誌第46巻となった. このため, 平成18年の第51回学会の演題抄録集は「日本唾液腺学会誌第47巻」に収録されるようになり, 以後, 学会と会誌の数字のずれがこれまでの3から4に変わった. 同年, 学会50周年記念事業として, 日本唾液腺学会編「唾液腺腫瘍アトラス」(金原出版, 2005)が刊行された(図8). これは, 症例検討に参画してきた本学会会員だけで分担執筆された学術書籍であり, 現在も全国の書店で販売されている. また, これまであすか製薬株式会社に大きく依存してきた学会の運営の見直しを行い, 特定非営利活動法人お茶ノ水学術事業会への事務業務委託, 協賛・賛助会員の募集, 年会費, 参加費の値上げなどが行なわれた. また, 役員若返りを図るべく, 会則の変更(役員定年, 任期の取り決め)が行なわれ, 会計監査も設置されることになった. 初代会計監査には芝紀代子(文京学院大保健医療技術)が就いている.

平成20年(2008)より, 筆者が第10代の会長となった. 前会長に引き続き, 学会の活性化, 会則の見直し, 運営の強化を図るべく, 幹事会を中心に検討している. 平成20年の

第53回学会では, 総演題数が36とここ数十年では最高を記録した(表3).



図7. 唾液腺学会ホームページのトップページ

アクセス数は1ヶ月2000~3000に上っている.

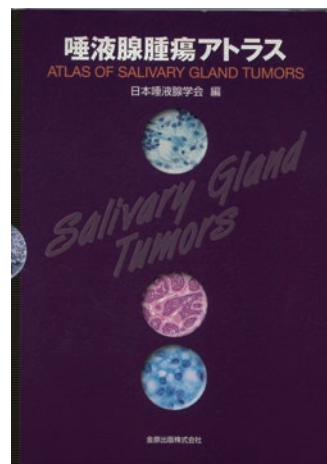


図8. 唾液腺腫瘍アトラスの表紙

現在も書店で販売されている.

表3. 唾液腺学会演題数の推移

回	年	会長	一般演題	症例検討	シンポジウム	特別講演	総演題数	参加者数	会員数	会費納入会員数
1	1956	緒方知三郎	47			1	48			
2	1957		32			2	34			
3	1958		46				46			
4	1959		62			2	64			
5	1960		30				30	159		
6	1961	緒方 章	28			1	29	151		
7	1962		21		17	1	39	155		
8	1963		22		7		29	145		
9	1964		15		4	1	20	147		
10	1965		24			2	26			
11	1966		18			2	20	139		
12	1967		19		1	2	22			
13	1968		19			1	20			
14	1969	滝沢延次郎	32			1	33			
15	1970		17		3		20			
16	1971		10			2	12			
17	1972	田坂定孝	14			1	15			
18	1973		10			1	11			
19	1974		10			1	11			
20	1975	井出源四郎	10			1	11			
21	1976		15		5	1	21			
22	1977		10		4	1	15			
23	1978		12			2	14			
24	1979		15			2	17			
25	1980		19		5		24			
26	1981		20			1	21			
27	1982	青沼 繁	15		1		16			
28	1983		25			1	26	98	256	84
29	1984		33			1	34	181	327	79
30	1985		28			1	29	150	340	107
31	1986		22			1	23	127	353	143
32	1987		30			1	31	142	384	140
33	1988		30			1	31	150	406	301
34	1989	高谷 治	32			1	33	150	406	301
35	1990		30			1	31	139	436	310
36	1991		28	3		1	32	133	426	286
37	1992		25	5		1	31	135	411	282
38	1993		20	3		1	24	99	408	278
39	1994		20	4		1	25	104	389	266
40	1995	遠藤浩良	17	6		1	24	114	378	257
41	1996		14	3		1	18	84	378	263
42	1997		22	7		1	30	114	367	254
43	1998		17	10		1	28	105	366	266
44	1999		14	14	5		33	116	358	242
45	2000		16	7	5		28	117	349	246
46	2001	久米川正好	17	9		1	27	102	364	251
47	2002		15	8		1	24	101	355	253
48	2003		25	8		1	34	117	352	236
49	2004		20	7		1	28	121	359	233
50	2005		23	6		1	30	105	362	235
51	2006		16	8		2	26	101	346	207
52	2007		22	6		1	29	98	351	218
53	2008	森永正二郎	21	14		1	36	112	347	182

表4. 唾液腺学会の特別講演

回	年	会長	特別講演			演題	その他の特別企画
			演者	演者所属	演者		
1	1956	緒方知三郎	滝沢延次郎	千葉大病理	病理学から見た唾液腺内分泌について		
2	1957		今川与曹 高岡善人	東京医科歯科大学歯学部 東大内科	唾液腺ホルモンの歯科領域における応用 唾液腺ホルモン研究に対する考え方		
3	1958						
4	1959		伊藤四十二 吉岡 清	東大薬学部 大阪大学歯学部第一口腔外科	国外におけるパロチン研究の動向 米国における唾液腺ホルモン研究の動きについて		
5	1960						
6	1961	緒方 章	H. S. Fleming	Howard Univ. coll. of Dentistry	Studies with Protein or Salivary Gland Extracts		
7	1962		E. Werle	Klinisch-Chemisches Institut Chirurgische Klinik der Universitaet Muenchen	Vasactive Substances of Saliva and of Salivary Gland		
8	1963						
9	1964		滝沢延次郎	千葉大学医学部病理学	日本におけるカシンベック病について	シンボジウム:慢性感染症と唾液腺ホルモン	
10	1965		吉村寿人 川勝賢作	京都府立医大第一生理 大阪大学歯学部	唾液の塩分,水分分泌機構とその神経支配 唾液腺の病態に関する2, 3の問題		
11	1966		丸山幸太郎 中沢恒幸	老人病研究所 慶應大学医学部神経科学教室	唾液腺ホルモンと血液像 神経成長因子 Nerve Growth Factor (NGF)の研究		
12	1967		滝沢延次郎 藤原美岩	千葉大学病理学教室 関西電力病院内科	唾液腺内分泌の病理学と組織化学 内科領域における唾液腺ホルモンの臨床応用	特別報告: 北村武(千葉大学); 耳下腺癌の臨床	
13	1968		青沼 繁	大阪大学薬学部微生物化学	唾液腺ホルモンの Bioassay 及び Immunoassay の検討と限界		
14	1969	滝沢延次郎	森脇千秋	東京理科大学薬学部生理化学	顎下腺における血流調節	シンボジウム:唾液腺の活性物質について	
15	1970						
16	1971		鈴木芳太郎 井出源四郎	東京歯科大学生化学 千葉大学病理	Stress loop に及ぼす唾液腺ホルモン Parotin の影響 唾液腺ホルモン長期使用(約10年間)の1例について		
17	1972		遠藤浩良	東京大学薬学部生理学	ホルモン作用の in vitro 研究:器官培養液と合成培養液の応用-		
18	1973	田坂定孝	三輪 剛	東海大学内科	胃排出機能について		
19	1974		金子 仁	日本医科大学老人病研究所基礎部	緒方知三郎先生の剖検報告		
20	1975	井出源四郎	北村 武	千葉大学耳鼻咽喉科	耳下腺腫瘍について		
21	1976		川村洋二郎	大阪大学歯学部口腔生理学	唾液分泌の神経機構	シンボジウム:唾液腺の分化と調節	
22	1977		尾形悦郎	筑波大学臨床医学系内科	カルシウム代謝とパロチン	シンボジウム:唾液腺に由来する生理活性物質 Nerve Growth Factor (NGF)について	
23	1978		星野一正 奥田 稔	京都大学医学部解剖 日本医科大学耳鼻咽喉科	糖尿, 病態, 機序における唾液腺の重要性 非腫瘍性唾液腺疾患の2, 3, 特に特徴ある慢性唾液腺炎	特別報告: 井出源四郎(千葉大病理); 緒方章先生の剖検記録-唾液腺ホルモン(Parotin)長期(約40年)使用の一部検例-	
24	1979		水谷 彰 高岡善人	名古屋市立大学 長崎大学医学部第1内科	耳下腺から抽出されるパロチンおよび免疫能増強物質(研究の経緯を綴として) 唾液腺ホルモンの研究-その過去, 現在から未来への希望		

25	1980							特別報告5題
26	1981	山本寛次	川崎医科大学眼科				老人性白内障の発生機序とパロチン	会長講演;井出源四郎(千葉大病理);唾液腺内分泌研究の回顧(形態学の面から)
27	1982	青沼 繁						
28	1983	今野昭義	秋田大学医学部耳鼻咽喉科				Speegren 症候群, Mikulicz 病およびその周辺疾患をめぐる問題点	
29	1984	小守 昭	徳島大学歯学部口腔病理				Speegren 症候群における唾液腺の変化	
30	1985	林 泰三	岐阜医科大学学生物学				唾液腺中の細胞成長因子とくに上皮細胞増殖因子の生化学	
31	1986	太田 稔	岩手医科大学歯学部口腔生化学				唾液腺のステロイド・ホルモンの作用	
32	1987	長尾孝一	帝京大学医学部歯学部口腔病理				唾液腺腫瘍の病理組織学的研究-耳下腺腫瘍を中心として-	
33	1988	室田誠造	東京医科大学歯学部顎口腔機能研究				アラキドン酸代謝異常と病態ならびにその制御	
34	1989	菅野義宣	広島大学歯学部口腔生理				唾液腺腺房細胞のキヤップ結合の役割を考える	
35	1990	佐々木英夫	山形大学医学部第三内科				インクレチン-インスリン分泌促進性消化管因子	
36	1991	宇井理生	東京大学薬学部生化学				情報伝達系における GTP 結合蛋白質の役割	
37	1992	鈴木不二男	大阪大学歯学部生化学				軟骨細胞の増殖と分化をめぐる最近の話題	
38	1993	武田泰典	岩手医科大学歯学部口腔病理				非腫瘍性唾液腺病変の病理	
39	1994	木村正康	富山医科大学薬学部薬品作用				糖尿病態における唾液腺分泌の薬理学的意義:漢方薬研究から血糖調節に係わる唾液腺ペプチドの発見	
40	1995	山下敏夫	関西医科大学耳鼻咽喉科				耳下腺腫瘍の診断と治療	
41	1996	野村寛太郎	大阪大学医学部病理				in situ ハイブリダイゼーション:原理と病理学への応用	
42	1997	渡邊 淳	名古屋市立大学薬学部薬理学				臨床薬物動態学と薬物の唾液中排泄-その基礎と応用の可能性-	
43	1998	久米川正好	明海大学歯学部口腔解剖学第1講座				破骨細胞と骨吸収-破骨細胞の生きた営み-	
44	1999							シンボジウム:唾液分泌機構解明へのアプローチ
45	2000							シンボジウム:唾液腺腫瘍の基礎と臨床
46	2001	清野 宏	大阪大学微生物病研究所免疫・生体防御				粘膜免疫のダイナミクス	
47	2002	木村郁子	富山医科大学薬学研究科臨床薬理学				オレキシン及び唾液由来ペプチド, リリパチンの血糖下降作用	
48	2003	遠藤文夫	熊本大学大学院医学研究部小児科学				唾液腺由来内胚葉系幹細胞とそれを用いた再生医学研究	
49	2004	吉原俊雄	東京女子医科大学耳鼻咽喉科				多様な唾液腺疾患-その診断と治療-	教養講演2題
50	2005	廣川信隆	東京大学大学院医学研究科				細胞内物質輸送と Kinesin Superfamily Motor Proteins, KIFs: 運送子, 構造機能, 動態	
51	2006	村上政孝	自然科学研究機構発生学研究所ナノ形態生理				摘出血管灌流唾液腺の研究成果と展望	
52	2007	山科正平	北里大学医学部解剖学教室				唾液腺を見ながら考えたこと	
53	2008	森永正二郎	札幌医科大学医学部耳鼻咽喉科				唾液腺の障害と修復の病理-基礎から臨床へ-	
							IgG4 関連疾患から見た唾液腺病変の位置づけと新たな展開	

6. おわりに

50 数年に及ぶ唾液腺学会の歴史を通覧して見て、唾液腺“内分泌”の研究のみであった発足当時の状況が、数年で方向転換が図られ、演題数の減少から一時は存亡の危機にさらされながら、淘汰されることもなく、唾液腺のあらゆる領域を受け入れるユニークな学会としてかろうじて細々と存続してきている、というこれまでの経過が理解できる。現在の解剖学の教科書には、唾液腺が内分泌器管であるとはどこにも書かれておらず、本学会会員の大多数である戦後世代の者には、パロチンの名前さえ知らないものが大部分であろう。過去は過去として、学会の今後の行方は現会員の意思に委ねられている。いずれにしても、唾液腺と唾液には、まだまだ沢山の未知の物質や機能が隠されているに違いない。研究対象として魅力に満ち溢れている。

世話人の立場から見て、唾液腺学会が現在抱えている最大の課題は、演題数を如何に増やすか、会費を納入し合会にも出席するアクティブな会員数を如何に増やすかということである。演題数とアクティブな会員数が増えれば、学会の学術的な内容も豊かになり、学会運営の会計上もゆとりが生まれ、よい循環が始まる。そうならない理由は何か。まず、唾液腺という大雑把なくくりでは、あまりにも専門分野と興味の対象の異なった人の集団となってしまう、しかも個々の分野にかかわる人の絶対数がもともと多くないため、全体としてまとまりがつかないといえる。また、現在では学会の数が多く、会員の殆どすべてが、主たる所属学会と発表の場を別に複数持っているため、唾液腺学会まで手が回らないということもあろう。役員立場からは、今後、より魅力ある学会、より優先順位の高い学会にしていくために更に工夫していく必要がある。そして、やがて日本医学会に加盟できるような、査読制度のある学会誌をもつ学会、国際性のある学会に育っていくことを期待している。

この拙文が、更に半世紀後、誰かによって読まれるかもしれないことを想像しながら筆を置くことにする。

これをまとめるにあたり、学会誌の資料の検索にご協力くださいました唾液腺学会事務幹事の木村孝一さん、熊坂知子さんに深謝いたします。また、この原稿を校閲してくださいました名誉会長の遠藤浩良先生、前会長の久米川正好先生にこの場を借りてお礼申し上げます。

なお、この内容は 2008 年 12 月 6 日に文京学院大学で行われた第 53 回唾液腺学会の会長講演として発表した。

2009 年 8 月 2 日記す